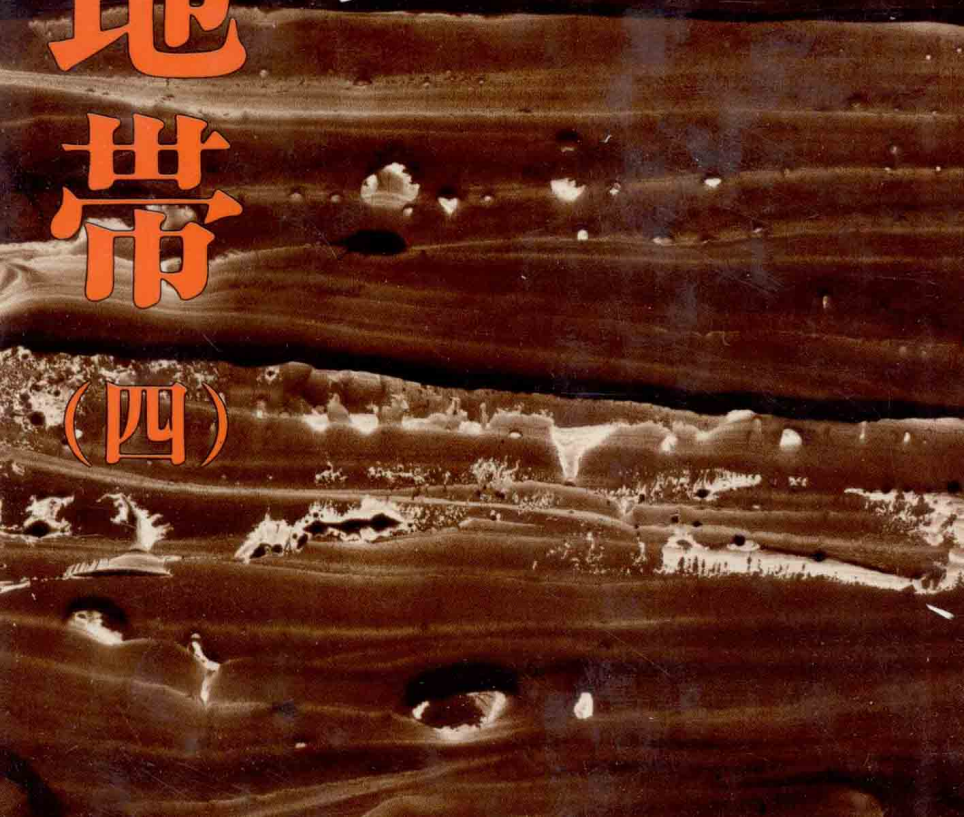


山崎豐子

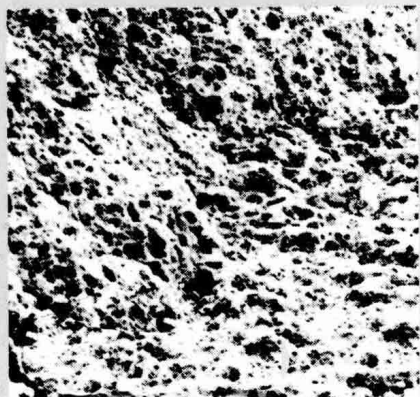
不毛地帶

(四)



不毛地帯

(四)



山崎豊子

新潮社

不毛地帯(四)

昭和五十三年九月十日 発行
昭和五十三年十月五日 三刷

定価 一〇〇円

著者 山崎豊子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 (業務部)〇三二六六―五一―

(編集部)〇三二六六―五四―

振替 東京 四一八〇八番

印刷 二光印刷株式会社
製本 新宿加藤製本

© 1978 Toyoko Yamazaki Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

不毛地帯(四)・目次

一章	その日……………	7
二章	イランの賭け……………	74
三章	油兆なし……………	180

四章
天

声
……
245

五章
極

光
……
293

装
幀

司

修

不毛地帶(四)

これは架空の物語である。過去、あるいは現在において、たまたま実在する人物、出来事と類似していても、それは偶然に過ぎない。

一章 その日

京都の残暑は、厳しかった。

汗水が近くに流れている洛北の秋津千里の家の庭にも、油蟬が一斉に鳴きだしていたが、陶土のついた長袖のブラウスとジーンズ姿の千里は、もうすぐ窯出しする作品のところで頭が一杯で、落着きなく工房の中を動き廻っていた。「先生、窯出しはまだ小一時間せんと、無理どっせ、ここ二、三日碌に寝んと窯焚きにかかってはるから、暇みてはちよつとでも寝んと、倒れはりませ」

大きな展覧会の出品の時だけ、師の叶頼山の工房から手伝いに来てくれる齡とった職人が、声をかけた。

「窯出しして、焼き上った作品を手取るまで、とても眠る気になれないわ、何といつても今度は、日本陶芸展にはじめて出品する作品だもの」

長い髪をきりつと一つに束ねて上に結んだ千里は、額や項に流れる汗をブラウスの袖で拭い、隈がにじんだ瞳をきらりと輝やかせた。日本陶芸展は新聞社が主宰する伝統のある展覧会で、唐津や備前、益子など各地の窯場を代表す

る代々の名だたる陶工の作品が一堂に陳列され、女性の陶芸家が出品できる機会は、限られていた。

それだけに千里の作品に賭ける意気込みは大きく、出品作の青磁の壺は、轆轤廻しや乾燥の過程で、何度もやり直したが、火の芸術といわれる陶芸の勝負は、窯焚きに尽きる。陶土のちよつとした成分の違い、釉の調合、そのかけ具合、窯の温度、火を焚く時間によって、微妙な変化を遂げ、思いがけない成果に恍惚とした歓喜にひたる時もあるれば、真つ二つに割れて出て来た作品の前に、躊躇ってしまうこともある。

ガス窯で焚いた千里の青磁の壺は、窯の中の温度を、空気が調整しながら、十六時間にわたって九百度から千二百度に上げ、バーナーを消した後、窯の中の温度が三百度前後に下るまで、さらに十時間ほど待たねばならない。

千里は時間待ちに、青磁の釉に使う水瓶の中の灰のあく抜きをしながら、窯の中の作品に思いをめぐらせた。青磁の生地に入る罅、つまり貫入の大胆さを狙い、釉を厚目にかけたが、釉が剝脱せず澄んだ発色をしているだろうか、陶土と釉の収縮の差は的確で、狙った通りの貫入が入っているだろうか、体は徹夜の窯焚きで疲労困憊していたが、不安と期待にかきたてられ、神経は昂っていた。

柄杓で、上澄みにうかんだあくを掬い、水瓶に新しい水を入れてから、千里はガス窯の温度計を見、窯開けの用意にかかった。

木綿のスカーフを眼深に巻き、軍手を三重にはめ、千里は折るような気持で、ガス窯の開き戸を開けた。息のつまりそうな熱風が、かっと顔の皮膚を焼くように吹きつけたが、千里は顔をそむけず、滑車のついた台を静かに手前に引くと、出て来た台の上に、高さ三十センチのたつぷり肩のはった青磁の壺が三つ、出て来た。ガス窯の横に棧板を並べた職人が、

「ほう、ええ色やおへんか、冷めたら、もっと澄んだ色になりませ」

感じ入るような声を上げたが、千里は緊張した眼ざしで、手前の壺を両手でそと取り上げた。高温で軍手がじゅつと茶色にこげ、かすかな煙がたつた。三枚の軍手を通して伝って来る熱で掌が火傷しそうになりながら、壺を棧板に置くと、壺の底が直に当たった板が焦げた。一旦、棧板に並べた壺は、職人がすぐまた別の棧板に移しかえた。急冷して、貫入を大きくするためだったが、といって、冷たい土やコンクリートの上に直接、置くと、大きすぎる温度差で、作品はあつという間に割れてしまう。

不意にピンという鋭い音がしたかと思うと、二番目に取り出した壺の底から、ゆったり量感のある肩にかけて、大きな貫入が、千里の眼の前で入り、そこから連鎖反応のように、細かい貫入がびびりと奔った。他の二つの壺にも窯から出した後の貫入が入ったが、千里は、一番先に取り出した壺を手にとると、暫し眺めてから、三和土にいきな

りびしつと投げつけた。

「ど、どこがお気に入りまへんのどす」

見惚れていた職人が、惜しそうに云った。

「口のあたりの発色がむらがあつたわ」

汗みどろになり、千里は云った。

「そこが、味があつて、よろしおしたがなあ」

「あれは味ではなくて、単なる色むらよ」

千里は言下にそう云うと、残った二つの壺を見比べていたが、つと手を伸ばすと、最後に取り出した壺も、職人の止める間もなく、びしつと割った。

「少し力みすぎてるのかもしれないわ、残ったこの一つも、冷めきるまで解らないけど、発色が濃目ね」

心魂籠めた作品を、何の躊躇いもなく、叩き割った後、唯一つ残った壺に、暫時、厳しい目を向けていたが、くると職人の方を振り返ると、

「来て戴いて助かったわ、明日、叶先生にこの壺を見て戴くけど、日本陶芸展ということにこだわらず、もう一度、やり直してみるつもり——、また来て下さるかしら」

窯出しが終った途端、眼の下が急に窪むような疲れを覚えながら頼むと、

「喜んでお手伝いさせて貰います、先生のお仕事ぶりは、女はんとは思えん阿りのない一途さがあつて、気持よろしおすわ」

職人はそう云い、千里が割った壺のまだ熱い破片を集め

て、庭の隅のガラ場へ片付けて、帰って行った。

千里も工房を出ると、まだ昼過ぎだったが全身、汗まみれの体を流すために、風呂をたき、髪を洗い、浴衣に着替えて、縁側の籐椅子で涼んでいるうちに、泥沼にひきずり込まれるような深い眠りに落ちた。

どれぐらい眠ったのか、電話のベルで眼が醒めた。居間の方へたって行き、受話器を取ると、

「もしもし、僕だ、変りないかい」

壹岐の声がした。東京の壹岐のマンションで、娘の直子と顔を合せ、気まずい思いのまま別れて以来の電話であった。千里は日よけの簾越しに西陽が強くなっている庭の方を見ながら、

「さっきまで展覧会へ出す作品の窯出しをしていて、一息入れていたところ、東京もまだ暑いでしょうね」

「いや、昨日から会議で大阪に来ていて、今、六甲山上のゴルフ場からなんだ、接待ゴルフが終って、ちよっと芦屋の社長宅へ寄ってから会いたい、窯出しの後だと、疲れているのだろうね」

その短いが、優しい壹岐の心配りに、千里は会心の作品が出来なかつた虚しい疲労感が一気にとける思いがした。

「ほんとは、今日はこのまま眠ってしまいたいぐらいだけど、出かけますわ、大阪で？」

「そう思っていたけど、僕の方から京都へ行こう、久々にお父上の秋津中将のご霊前にもお詣りしたいと思っている」

千里は、そう云われて、口ごもった。今年父の二十三回忌に当り、先月、ごく内輪で営んだが、壹岐は父の二十三回忌を覚えていたのだろうか。出来れば壹岐に詣つて貰いたかつたが、自分と愛人関係になつた今、どういう思いで二十三回忌の法要を受けとめるかと思うと、云い出しかねたのだつた。

「どうしたんだね？」

黙り込んだ千里に、壹岐の声がした。

「いえ、夕食を用意しますけど、何を所望？」

千里は、明るい口調で云うと、

「疲れてるのに悪いよ、うまいものをご馳走するから、京都へ着いたらもう一度、連絡する」

壹岐はそう云い、電話をきった。

六甲山カントリークラブで、接待ゴルフを終えた後、壹岐は大門の誘いで、夙川の大門邸へ寄つた。

車が夙川の高台にある大門邸に着くと、若いお手伝いが鉦打ちをした大きな扉を開け、妻の藤子も玄関に出迎えた。

壹岐の姿を見ると、

「まあ、壹岐さん、お久しぶりですこと、お見えになることが解つてましたら、それなりに心づもり致してましたのに」

細面に、流行の銀縁の眼鏡をかけた藤子は、愛想よく云つたが、齢を取つても権高なものは、変りなかつた。

「土曜の午後ですのにお邪魔致します、気になりながら、

奥様にはいつもご無沙汰を重ね、恐縮です」

妻を亡くした後、壹岐は里井の妻が、社長夫人にまめまめしく尽すようなことは出来なかった。藤子はほっほっほっと笑い声を上げ、

「そりゃあ、お独りでいはるのですもの、そんなことはどうぞお氣遣いのう」

やんわりとした関西弁で応え、数寄屋造りの奥座敷へ案内した。広い庭には、築山があり、五葉松が見事な枝ぶりを見せていた。マンション住いの壹岐が、ほっと寛ぐように眼を眺わしていると、高校生らしい男の子が横の縁側から顔を出し、

「おじいさん、お帰りの、今日のスコアはどうやった？」

「そら、お前らのパパとはゴルフ歴が違うから比較にならない、一回、手ほどきしてやろうか」

「コーチはええけど、ジュニア用のセット買ってくれへんかな、パパは薬会社勤めやからしぶちゃんなんや」

と云い、来客の壹岐の姿に氣付くと、慌てて一礼し、ほんなら後でと去って行った。

「暫くのうちに、すっかり大きくなりましたね」

二年前から、大門邸には日本製菓の大阪本社勤務になった長男一家が同居し、今の高校生が大門の初孫に当った。

「体ばっかし大きゅうなって、わしの顔見たら小遣いせびりか、おねだりや」

そう云いながらも、大門は眼を細めていると、藤子がお

手伝いに指図してビールを運んで来、

「何のおかまいも出来ませんが、どうぞごゆるりと——」
と云い、壹岐と大門にビールを注いだ。

「お食事など、毎日、どうしてはりますの、お独りでは大へんでっしやる」

「昼も夜も会合が多いですから、それほど……、近くに娘がいて、時々、家庭料理も作ってくれますしね」

「それならいっそ、一緒に住まわれればよろしいやないですの、それともやはり家に入って来はった娘婿さんというのは、お気に入りやないのです」

「そんなことはありませんが、社長宅のように大きくありませんから……」

壹岐が、口を濁すと、大門が、

「他の家のことまで、お節介な奴やな、壹岐君とはちよつと話があるから、退つとりい」

と窘め、藤子がむっとして出て行くと、

「君を家へ誘ったのはほかでもない、例のサルベスタン鉱区の件、日本石油開発公社の調整ではうちは五番目やそうやが、どうする気や」

「実は私もそのことでご相談があったのですが、昨日は会議が続き、社長もお忙しそうでしたので申しそびれまして——、いろいろ考え、迷いに迷ったのですが、かくなる上は公社グループから離脱し、うち独自で国際入札出来な

いものかと思ひましてね」

「なに、公社グループから離脱して国際入札したいやて？
商社マンがどないして石油掘るんや」

ビールのコップを口もとのところで止め、大門は呆れるように、壹岐の顔を見た。

「もちろん、その場合は技術的にも資金的にも、近畿商事一社ではやれませんか、その両方を併せ持っている外国の獨立系の石油開発会社に資本参加して貰い、二社連合で入札することになります」

「どこか、心当りでもあるのか」

「いえ、目下、兵頭がロンドン、ベイルートあたりで物色中ですが、もしいいパートナーが見つかれば、社長は決裁して下さいませうか」

大門の覚悟のほどを、確めるように聞いた。

「しかし、突然、そう云われてもな」

ぐうっと、ビールを干しながら、云った。

「ごもつともです、しかし誰が見ても今度の公社の出資割当ては不自然で、本気で石油を当てようというより、万一、当らなかつた場合の責任逃れが先にたつていような順位だと云えます、裏でどんな政治的画策があつたのか知りませんが、開発会社の国際資源開発はともかく三菱、五井、東京商事の顔ぶれを見えますと、船頭多くして船動かすの危惧が多分にあり、そんなグループの末端について、いのようにされるぐらいなら、外国石油会社と組んだ方が石油発見の確率が高いと思います」

「開発費はいくら位、かかるものや」

「約百億円ですが、鉱区獲得の利権料が上乘せされますので、二百億と考えねばなりません、このうち外資が五〇％持つてくれれば、うちが負担するのは百億です」

「ふうむ——、それでもし当つたらどれぐらい儲かるものや」

「一般に国際石油資本のレート・オブ・リターン（利益回収率）は、二五％以上なければやらないということになっていますが、日本の場合は、メジャーの掘削したあとの落ち穂拾いのな後発の立場ですから、そこまで望めませんが、専門家筋の計算では円にして約一千億円のリターンが得られるとのことですよ」

「ほう、一千億、そない儲かるものか」

大門は、身を乗り出すように云った。

「それは巧く当ればということで、何しろ一本の試掘に要する費用が億単位ですから、一本井戸を掘る度に金利のかかつた金とその都度、ふっ飛び、しかも地質学者たちが、有望だと判断した場合でも当らない時があり、油光が出ても商業ベースにのらない程度の場合もありますから、決して安易に考えて取り組める仕事ではありません」

石油開発で当つた時の利益回収率を聞いて、俄かに積極的になつた大門に、冷静な認識を求めるように云うと、

「そら、ま、そうやけど、アラブ石油の山田太郎かて、石油の開発技術が発達せんあんな以前に当てたやないか、中

東は、インドネシアと違つて、桁違ひに油の埋蔵量が高いところやから、当れば大きいはずや」

「しかし、一九五五年以降、一号井で石油が当つたなど、世界中でアラブ石油以外、殆んどない稀中の稀のラッキーさんなんですよ、幸い奇蹟的に一号井が当つたからいいもの、もし失敗したら、財界有志から金を集めていた山田太郎氏は腹を切る覚悟だつたということですから、よほどの覚悟をもつて当らねばなりません」

壹岐は、石油の利益回収率を聞いた途端、眼を光らせて、アラブ石油の山田太郎のように当てられるものと安易に考えている大門に釘をさし、

「それにわが社が、公社主導型の日本グループから離れて、外国石油会社と組んでやるとなれば、一波瀾、避けられませんが、第一、たとえ半分でも百億円のリスクマネーをどう調達するかという問題は大きいですからね」

と云うと、浮かれ気味だつた大門は、俄かに表情を引き締め、

「確かに石油の場合は、当らんかつたら、他の事業のように何割かの担保が取れるという代物ではなく、全くかけ捨てのオール・リスクマネーやから、慎重に考えんといかな、財務には打診してみたのんか」

「ところが私が頼りにしている財務本部長の武蔵君が、一足違いでヨーロッパ出張に出かけてしまいましたので、今のところは誰にも話していませんので、ですが社長、当社

がさらに重工業化へ体質改善して行くためには、石油開発は最大の戦略事業です、というのは石油利権はどの国もトップが握っていますから、そうした人脈と繋がることによつて、商社活動に必要な情報が入手出来、近畿商事の知名度が高まり、さらに石油関連の鉄、機械、タンカー、港湾、道路建設へと商権が核分裂的に増えて行くメリットがあります、今の会社の体力からすれば、リスクヘッジを慎重に考えれば、やれないことはないと思います」

大門の心に訴えかけるように云うと、大門は揺り動かされるように、

「里井君や、武蔵のボスの宝田君あたりはどう云うか知らんが、リスクヘッジさえしつかり出来たら、わしは基本的に賛成や、鉄鋼担当の堂本君も乗って来るんやないか」

「そうだとよろしいんですが、堂本専務は昨日、午後の会議が終るなり、これからオーストラリア出張だと、急いで飛びたれましてね」

と云うと、大門はコップを置き、

「仕事の話はこれぐらいにして、久しぶりに家庭料理でも食べて行きい」

夕食を勧めたが、京都で千里と会う約束をしている壹岐は、

「いえ、突然、伺つたのですから奥様方にお手数をおかけしますし、休日ぐらい社長も、お孫さんたちとゆっくり団楽してあげて下さい」

と云い、早目に大門邸を辞した。

京都の南禅寺の山門に近い『松風亭』の風雅な庭に張り出した床几に腰をかけ、壹岐と千里は、名物の生麩料理に箸をつけていた。

油照りの残暑も、夕風の時刻を過ぎると、涼風がそよぎ、元寺院であつた庭に寛の水音が響いた。

千里は、宮古上布に博多の単衣帯を締めた涼しげな姿で、ビールを注ぎながら、

「いかが？ お氣に入つたかしら、京都の生麩料理は」

鄙たお膳の上に並んだ生麩の田楽や、あわ麩のあんかけなどを眼でさした。

「うむ、さつぱりして、そのくせこくがあつて、月並な懐石料理よりよほどまい」

壹岐は、はじめて口にする生麩料理に舌鼓を打つように云い、千里の注いでくれたビールを飲んだ。

「氣に入つて戴いてよかつたわ、生麩の天ぷらも、なかなかおいしくて、外人客がよく注文してましてよ」

近くの床几にいるアメリカ人らしい四人連れを見遣りながら、云つた。外人客以外は、床几の客は二人連れが多く、落ち着いた雰囲気は漂っている。

「君もビール、もっとどう？」

壹岐が促すと、千里は着物の袖が膳に触れぬよう、左手

でそつと押さえて、コップをさし出し、つうつと口に運んだ。

「久しぶりに、おいしいビール……、少し度を過したかしら」

ほんのり染つた頬を、掌で掩つた。生麻色に琉球絣の入つた上布をややぬき衣紋風に着た千里は東京で会う時よりのびやかな美しさと、成熟した女の艶やかさがあり、壹岐は、髪をアップに束ねた項や、袖口から見える白い二の腕に、眼を吸いつけられた。

「そんなに紅いかしら、恥しい——」

まじまじと壹岐に凝視され、千里は戸惑うように云つた。

「いや、そうしていると生粋の京女という風情だ、着物はよく着るのかい」

「西陣の叔母が、娘がいけないものだから、私にせつせと見たてて、持つて来てくれるけど、手を通ず機会って、あまりないですわ、何しろ土まみれの毎日ですもの」

そう云い、千里は笑つた。

「そういえば、また秋の展覧会で大へんな時期だつて？」

僕が六甲から電話した時は窯出しの直後ということだったけど、会心の作が出来たのかい」

「いいえ、氣に入つた三点を窯に入れたものの、取り出してみたら、二点は全くの失敗でその場で割つてしまひましたわ、残りの一点も会心とまで行かないので、また土捏か

らはじまって、寝ずの窯焚きが続きそうですわ」

「だが陶器には、そんな汗まみれの力作業など、ちらっとも感じさせない華やかさと冷たさがある」

壹岐は、結果だけが問われる企業のビジネスと同じ非情さが、陶芸の中にあるような気がした。

『松風亭』を出ると、二人は南禅寺の山門をくぐり、鬱蒼とした樹々が迫るような量感をもって茂っている境内を散策した。

人影はなく、森閑とした境内に、寄りそって歩く二人の足音だけが静かに響いた。お互いに話すことがありながら言葉に出しかねる躊躇いが、あった。

「こうして京都を散策するのは、三年前、比叡山の庵に、君のお兄さんの清輝さん、いや清澄さんを訪ねて行って以来だね」

僧籍にある千里の兄を法名で呼びかえて云い、
「その後、胸の方はよくなられたのかね」
と聞いた。

「あれから一度、参りましたが、十二年の籠山比丘の行を続けています、たとえ病いに倒れても、兄は山を下りませんわ」

千里はそう応えながら、自ら求めるようにニューヨーク駐在の壹岐のもとへ行き、そこで結ばれながらも、帰国後、ニューヨークと京都に遠く離れて過さねばならない苛だちと不安で仕事にも打ち込めず、兄の庵を訪ねて行った時の

ことを思い返した。それとなく千里の迷いを察したらしい清澄は、お兄さんの顔を見たくなくて来ただけという千里の言いわけに、「それなら私が勝手なお喋りをしよう」と云い、「仏教の根本は、一言で解りやすく云えば、共生の精神だ、自分のためだけの生き方ではなく、自分の生き方が人に感銘を与え、人に倅せをもたらす自他共に生きる共生の心が存在しなければならぬ、自分の執着、執念だけで動けば、自分を縛ると同時に、相手をも縛ることになり、修羅の世界に没してしまふことになる」と、はじめた仏の教えを話したのだった。そこには、もしか千里が壹岐に執着し、その執着が妹自身を縛り、壹岐をも縛り、不幸になる場合のことを戒める意味が、籠められていた。

だが、壹岐がニューヨークから帰任し、壹岐の一人住いのマンションで、情事を重ねながら、一緒に住うことを延ばし、延ばしにしている壹岐の逡巡を思うと、身勝手な男のエゴに従いきれないものを覚え、ここ暫くは千里の方からは、電話もしていなかったのだった。

「この頃、東京へは来ないのかね」
長い沈黙の後、壹岐の方から問いかけた。
「それでもないのだけど……」

「じゃ、どうして寄ってくれないのだ」

「代官山へ行つて、次は誰に会い、どんな風に取り繕いますの？ 海外駐在の息子さんから突然、今、帰って来たという電話があった時は、身繕いもそこそこに帰らねばなら